

■麻田剛立 天文学者。独自にケプラー第三法則を発見する域で、間重富・高橋至時ら、幕府天文方の礎になる俊秀を育てた。

あさだごうりゅう

- 1734= 豊後国杵築で、2年前まで藩儒で郡奉行をしていたが、大飢饉に際して救治の策が容れられずに辞任し、私塾を開いていた綾部綱斎(安正)の四男(6人兄弟の末子)に生まれる。名は妥彰。
- 1736= 2歳: 父に抱かれて天体について問答するなど、幼いときから天文に関心をもち、
- 1737= 3歳: 姉順が死去。
- 1738= 4歳: この年、父の私塾に短期間ながら入門した、11年上で後に大哲学者となる三浦梅園の目にも止まり、
- 1739= 5歳: 兄妥三が死去。庭に竹を立てた影や、
- 1740= 6歳: 縁側の軒先の影を測定し、季節による日の高さの変化に気づく。

1743= 9歳:

徳川吉宗隠居1745=11歳: 天体観測に熱中しすぎて、母から観測を禁止されるほどで、

1750=16歳: 父が死去。直前に渾天儀を貰い、継ぐことになった家業の医術にも優れ、

徳川吉宗没・1751=17歳:

1752=18歳:

三浦梅園とも手紙を頻繁に往来するようになる。

自然真言道・1755=21歳: この年、宝暦暦が施行される。

1756=22歳: 兄妥広が死去。

源内物産会・1757=23歳: 12月15日月食が、最初の観測記録。

宝暦事件・1758=24歳: 6月16日月食・12月15日月食。

大式政治批判1759=25歳: この年、山脇東洋が「蔵志」を著す。

大岡忠光没・1760=26歳: 5月1日日食・10月15日月食。

1761=27歳: 10月16日月食。

1762=28歳: 9月16日月食。*官暦に記載の無い翌年9月1日の日食を予報、町中の人々が疑うなか、三浦梅園のみ信じ、

1763=29歳: *9月1日が日食となって、的中。一躍、先生と呼ばれ、町内一の有名人となる。

錦絵始・・・1765=31歳: 7月14日月食。

忠臣蔵大当り1766=32歳: 1月16日月食。

明和事件・・・1767=33歳: 母が死去。1月1日日食。-

久留米藩工事1768=34歳: 11月15日月食。前年に杵築藩主になった松平親貞の侍医に任命され、思うように、天体観測や暦計算ができなくなる。参勤交代の藩主に従い、江戸へ行き、藩屋敷に勤務したのも束の間、

1769=35歳: 11月16日月食。大坂城加番役となった藩主に従い大坂へ行く。江戸と違って自由になっただけでなく、すでに文通していた(懷徳堂)の中井竹山・履軒兄弟と意気投合、天文に関わる多くの人たちから質問を受け、天文学を教えることの難しさを実感、再び天体観測に集中し始め、

1770=36歳: 5月1日日食・9月16日月食。大坂の時計職人戸田東三郎とも知合う。藩主の瀕死の急病を見かねて、自ら工夫した薬を用いて救うが、テングになっていたこともあって、先輩医師らの嫉視を買い、初めて挫折。藩主の配慮で、江戸に向かわず、杵築へ戻るが、大坂の暮らしが忘れられず、

御蔭参流行・1771=37歳: 藩主とともに先輩医師らも杵築に戻ってきたため、致仕を願い出るも許されず、

田沼意次老中1772=38歳: 兄妥胤に相談し、誰にも知られないように単身、大坂に赴いて、麻田剛立と改名。中井竹山・履軒兄弟を頼り、履軒が開いた私塾(水哉館)に実を寄せ、犬猫の解剖実験を繰り返し、

大原騒動・・・1773=39歳: 山脇東洋の「蔵志」ほか文献を読み、人体解剖した人物とも会い、その成果を履軒が絵にして人体解剖書「越俎弄筆」を刊行。本町4丁目で町医者を開業、すぐに評判になって繁盛するとともに、兄の心をこめた藩主への説明で、真相を知った藩主からの許しも出、3月1日の日食から、本格的な天体観測も再開。

解体新書・・・1774=40歳: 8月1日日食を、初めて自宅裏庭で観測。

黄表紙始・・・1775=41歳: 1月16日月食・8月1日日食。閏12月1日の日食観測で西洋式渾天儀をはじめて使う。閏12月15日の月食観測を坂町の難波屋でおこない、頼春水も見学。また、西洋式簡平儀を使う。

雨月物語刊・1776=42歳: 12月14日月食。

1777=43歳: 6月16日月食。

船蝦夷来1778=44歳: 山本彦九郎が買った反射望遠鏡で月を観測し、日本初の月面観測図を描く。8年後の元日の日食を予報。

源内獄中死・1779=45歳: 10月16日月食。

1780=46歳: 4月15日月食。

1781=47歳: 履軒の転居に伴い、本町に居を構えて、生計を立てるべく、医を開業。

天明大飢饉始1782=48歳: 兄妥胤が死去。2月16日月食・8月15日月食。

蘭学階梯・・・1783=49歳: 2月16日月食。

田沼意知刺殺1784=50歳: 7月1日日食・7月15日月食

蝦夷初調査・1785=51歳: 7月1日日食・12月15日月食。

田沼意次失脚1786=52歳: 6月16日月食・11月15日月食。三浦梅園の子修齡と娘婿永松寿助が入門。*1月1日、8年前の日食予報が的中、その名は天下に轟き、自信も深めて、暦の計算についての当時最高の書「時中暦」をまとめる。

寛政改革始・1787=53歳: 5月15日月食・11月15日月食。後に大学者になる高橋至時、間重富が入門、

1788=54歳: 5月15日月食。予報のズレを減らすべく、10年毎に計算数値を改訂する「消長法」をまとめる。

初の横綱・・・1789=55歳: 4月15日月食。三浦梅園が病臥の報に手紙するも、まもなく死去。弟子が増えてきたことから、自宅に、日本初の天文暦学専門の私塾(先事館)を開く。10月1日の日食の異地点同時グループ観測を皮切りに、足立信頭、山片蟠桃、西村太仲ら多数の俊秀を育て、幕末まで麻田派天文学者が全てを担って行くことになる。

この間、間重富が入手した西洋天文学の中国語訳「曆象考成(後編)」を見て驚愕、自ら書いてきた天文暦学の書を焼き捨てようとして、重富に諫められ、以後、「曆象考成(後編)」の研究会を開催、

松平定信引退1793=59歳: 1月16日月食・7月15日月食。*老中松平定信から秘密の使者が来訪、改暦事業に従事して欲しい旨伝えられるが固辞、代りに、高橋至時と間重富を推薦したところ、

ワヅカ正月・1794=60歳: 1月16日月食・12月1日日食。

写楽・・・1795=61歳: 6月16日月食・12月1日日食。その通りに、高橋至時と間重富に改暦の命令があり、

ポルト来航・1796=62歳: 5月15日月食・11月16日月食。

昌平饗始・・・1797=63歳: 5月15日月食を最後に、40年間に50回の観測記録を遺し、この前後に書かれた「五星距地之奇法」の中には、ケプラーの第三法則と同様の記述が含まれ、「曆象考成(後編)」には、ケプラーの第一法則しか含まれていないことから、独自に発見したと考えられるほどのレベルに達し、

古事記伝・・・1798=64歳: *「消長法」をもとに、至時と重富がつくった「寛政暦」が施行される。自らは老齢であったため直接加わらなかったが、陰の功勞者として幕府より白銀5枚の賞を受けて、

蝦夷地直轄始1799=66歳: 没した。以後、幕末まで天文方として業績をあげたのはすべて麻田派の流れをくむものとなる。

鹿毛敏夫「月に名前を残した男」、「没年日本史人物事典」、平凡社百科事典。鳴海風「星に惹かれた男たち 江戸の天文学者 間重富と伊能忠敬」で追補、